

開催地名	愛媛県四国中央市
開催日時	令和8年2月1日(日) 10:00~11:30
開催場所	四国中央市消防防災センター大会議室
語り部	針生 勝広(宮城県仙台市)
参加者	約80名
開催経緯	先日1月6日島根県を震源とする震度5強の地震が発生した際、本市においても震度4を観測した。久しぶりにこの本市で震度4を観測したとき、本当に恐怖を感じた。針生様の貴重な体験をもとにした仙台市での取り組みや避難所運営の話聞き、今後の活動に活かしてほしい。
内容	<p>(1) はじめに</p> <p>私は長年、消防職員として現場の最前線に立ち、平成26年には危機管理室併任となり、地震防災アドバイザーとして分かりやすく防災減災について市民に講話等の活動を行ってきた。平成28年の熊本地震では、仙台で培ったノウハウを携えて現地へ向かい、避難所運営のサポートにあたった。</p> <p>私たちが震災から学んだ避難所運営の教訓は、「避難所、避難者とも膨大な数に上り、既存の避難所運営マニュアルは地域、施設管理者、行政等との共有が図れなかった」等の問題があった。</p> <p>「防災・減災」と聞くと、どうしても重い話になりがちだが、あまりに構えすぎると知識は頭に入ってこない。今日は、当時のレギュラー番組でのテレビ出演経験も交えながら、皆様の心に「スーッと」入っていくような、生きた話をしたい。</p> <p>(2) 被災の記録</p> <p>平成23年3月11日、午後2時46分。マグニチュード9.0という、地球を揺らすような激しい震動が襲った。従来の避難訓練では「揺れは1分程度」と教えてきたが、あの日、私たちは2分、3分と続く長時間にわたる揺れを経験した。</p> <p>仙台港を襲った津波は推定7.1メートル。観測機器すら破壊される猛威を振るった。あの日、上空から撮影された映像には、住宅地が黒い波に飲み込まれ、燃え上がる家々が押し流されていく光景が映し出されていた。小学校の屋上には、救助を待つ人々が何百人も取り残されていた。仙台駅周辺には約1万1,000人の帰宅困難者が溢れ、避難所の数は288カ所、避難者数は最大で10万人を超えた。</p> <p>これほどの規模になると、市役所の職員だけでは物理的に手が回らない。</p>

「行政がなんとかしてくれる」という公助の限界を、私たちは痛いほど思い知らされた。

### (3) 事前の備え

この教訓から生まれたのが、仙台市独自の「仙台市地域防災リーダー（SBL）」制度である。自主防災活動の更なる活性化を図るため、防災に関する知識と技術を有し、町内会長等を補佐しながら、自主防災活動の中心的な役割を担う、地域に根ざした地域防災リーダーの養成を行うこととした。

#### ● 仙台市地域防災リーダー（SBL）の育成

すでに約1,000名が認定を受け、黄色いヘルメットとオレンジのビブスを着用して活動している。認定を受けて終わりではなく、定期的なバックアップ講習を行い、常に最新のスキルを共有している。

#### ● ハザードマップの「自分事化」

四国中央市のマップも拝見したが、実に見事に作られている。持っているだけでは宝の持ち腐れのため「車の中に一枚置いておこう」「家族でこの色を指差してみよう」といった、アナログな活用が命を守る初動に繋がると思う。

#### ● テクノロジーの活用

従来の「地震体験車」から、最新のVR技術を導入した。50mmを超える豪雨や津波のリアリティを疑似体験することで、バイアスを排除し、早期避難の意識を醸成している。

### (4) 避難所の在り方と心のケア

避難所運営で最も重要なのは、「ルール」と「顔の見える関係」である。震災当時、ルールのない避難所では土足で入る人が絶えず、乾いた泥が粉塵となって舞い上がり、避難者の健康を損なう事態も起きた。

こうした反省から、現在の仙台市では「避難者もまた運営の主体である」という認識を徹底している。

また、私は「友達防災」を提唱している。知らない人同士が集まる避難所はストレスが溜まりやすいもの。もし自宅に被害がない友人がいれば、食料を持参してそこへ身を寄せる。あるいは実家や親戚宅など、気心の知れた場所を避難先として確保しておく。これも有効な防災対策の一つである。さらに、コンビニエンスストアなどと協定を結び、「災害時帰宅支援ステーション

	<p>ン」を整備している。水道水やトイレ、道路情報の提供を受けられる拠点を可視化することで、帰宅困難者の不安を少しでも軽減する仕組みを作っている。</p> <p>(5) 伝えたいこと</p> <p>町内会のリーダーの皆様、防災だけを頑張りすぎないでほしい。皆様は日々、多岐にわたる地域活動で多忙を極めている。一人が抱え込むと、その活動は長続きしない。そこで提案したいのが、子どもたちを「戦力」にすること。避難訓練の際、小中学生を列に並ばせ、防災倉庫の中身をすべて出す「防災棚卸し」を一緒にやってみてほしい。「これは何?」「どう使うの?」と教えることで、彼らは避難所の最強のパートナーに変わっていく。整理整頓が得意な子どもたちが、出しやすいように倉庫を整えてくれる。そんな「多世代交流」こそが、真の地域防災力を育む。</p> <p>「絶え間なく伝え続ける」この思いをどうか無理のない範囲で、笑顔を絶やさずに地域へ持ち帰ってほしい。皆様のその姿勢が、地域の皆様の心を動かす一番の防災教育になるはずだ。</p> 
開催地より	<p>仙台市での経験に基づく具体的な話は、参加者にとって非常に分かりやすく、「地域での避難所運営を改めて見直すきっかけになった」、「防災マップで自分たちの地域をよく確認したいと感じた」など、多くの前向きな声が寄せられた。</p> <p>今回の講演は、住民一人ひとりが自分事として防災を考える契機となる、意義深いものであった。</p>